
あるコンサートホールで

ゲロッパー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるコンサートホールで

【Nコード】

N4866D

【作者名】

ゲロッパー

【あらすじ】

執筆期間約十日。卒論からの逃避のため書き始めました。

「あるコンサートホールで」

堀 敬治

「いい加減に貸したCD返せよ」

「悪い悪い。明日ちゃんと持ってくるよ」

「お前、昨日も同じこと言ってたろ」

「まあまあ、明日はちゃんと持ってくるからさ」

「明日の帰り、飯奢れよな」

「お前に奢る金はない」

「まあいいよ。それよりビルエヴァンスのピアノは最高だったろ」

「ああ。あれはなんて退屈な音楽なんだろうな」

「わからないかな。あの綺麗な音が」

「この退屈な毎日にピッタリな音楽じゃないか」

「お前とは分かり合えないな」

「まあ、退屈なものが退屈な人生を満たしていくのかもしれないな」

1

2006年、僕は日本中に沢山いる高校生の1人であり、日本中の人が皆思っているように退屈な世界を生きていた。僕は何十億人といる人間の中の一人に過ぎなく、大人が不景気に怒るように常に息苦しさを感じていた。

「お前、最近やる気ねえな」

高橋は煙草に火をつけ、竹山の顔を覗き込んだ。

私は全く無関係であるとも言いたげに川はゆつくりと静かに流れていた。河川敷に止められた自転車は夕焼けに照らされスポットライトを当てられているようだ。

「お前、進路指導の山口といつもどんな話してる？」

竹山はぼんやりと川の流れを目で追いかけているが、

「何って、大学行くか就職するかって話かな」

高橋の吐いた煙は夕焼けと重なって消える。

「俺はあの面談が苦痛でしようがない」

「将来はどうするんだ？ 大学には行かないのか？」

竹山は進路指導の山口の物真似をして言った。

「似てねーよ。何て答えてんの？」

「面倒くさいからさ。いつもウルトラマンになりたいですって答えてる」

「似てるな。頭の形とか顔色とか」

竹山は高橋の頭を平手で叩いた。

僕達は無意味な学校で無意味な教育をうけ、無意味な試験をうけ、無意味な高校生活を送っている。僕は自分の存在にさえ意味を見出せなくなっていた。

「なんかさ、ちっぽけだよな」

竹山は高橋の目を真剣に見つめ、こっそりと高橋の煙草を一本盗んだ。

「バレてるって」

竹山はアイドルのように無感情な笑顔で誤魔化した。

「ちっぽけなんだよ。俺もお前も。お前の事なんて誰が知ってる。所詮学校の奴くらいだろ」

「それはこれから変わらないだろうな」 高橋は言った。

「火貸して」

高橋はライターを右手に持って竹山の顔に近づけた。そして煙草に火をつけるとみせかけて竹山のうっすらと生えた髭に火をつけた。

「お前もそろそろ将来の事考えたほうがいいよ」

しかし竹山は顎を両手で抑え、芝生の上を転げまわっている。

高橋は自転車に跨った。目に涙を浮かべた竹山が走って後ろに飛び乗った。

背中に朝日を浴びて、竹山は眠い目をこすりながら学校に向かう坂道を歩いていた。

この坂道で何度家に引き返しただろう。

沢山の生徒達が雑談を交わしながら校門をくぐっていく。

竹山は起きているか寝ているかも判断しにくい状態のまま同じように校門をくぐる。

下駄箱で靴を変えていると高橋が校舎へ入ってくるところだった。

「おう。おはよう」

竹山は無愛想に挨拶する。

高橋が竹山にCDを手渡すと竹山は無言で校内に入ってしまった。

「なんだ。まだスネてんのか。」高橋が遠くから大きな声で叫んでいる。

教室に入ろうとすると隣の席の山田が話しかけてきた。

「おはよう。怒ってんの？」

竹山は無視して自分の席に向かった。

窓際の一番後ろの席に腰を下ろす。窓からは儂い夢を目指して汗を流す野球部員が引き上げてくるところだった。グラウンドと校舎を繋ぐ階段の脇には花を散らした桜の木が階段を追いかけるように並んでいる。

一時間目の授業を知らせるチャイムの音が校舎中に響く。

この世で一番嫌いなものはこの無機質なチャイムの音とブラックコーヒーだ。ミルクも砂糖もないコーヒーなんて苦くて飲めたものじゃない。

教室の中は鞆を持って慌てて飛び込んでくる生徒や朝のひと時の雑談を切り上げて席へつく生徒達でごった返し始める。

皆が席に着いたのを見計らったかのように数学教師の井上が勢いよく教室へと入ってくる。

世界は自分を中心に回っているかと思っているような態度のかい男だ。この世からブラックコーヒーがなくなって嘆く人はいるだろう

が、井上がいなくなって嘆く人は誰一人としていないだろう。
井上の挨拶を合図に、竹山は机に頬杖をつけて目を閉じる。

<1>

あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいましたなんて出だしから始まるお話は誰もが聞いたことのある話だ。

あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいた。しかしあるところと言っても山に囲まれた一軒家なんてものではなく、名古屋駅から歩いて苦にならないような高級マンションである。

石田洋平は台所に立ち、夕食の献立を考えている。石田家では毎日交代で料理をつくっている。いつからだろうか。気づいたらそのようなルールが出来上がっていた。

石田愛子はリビングでテレビに釘付けになっている。夕方五時のテレビでそれほど夢中になる番組でもやっていただろうか。

オムライスを作ろうと冷蔵庫に手を伸ばし、タマネギを取り出そうとするとマグネットで貼られた一通の手紙に気づく。孫の慎平からの手紙だとすぐに分かる。

タマネギを刻みながら孫の書いた手紙を読み進めていく。

慎平は今年で十歳になる。洋平と愛子にとっての初孫であり、愛子は慎平を溺愛している。夏休みや正月に顔を合わせた時などは七十歳とは思えぬような足腰で玄関へと走っていく。

息子の和志に対しては一貫して厳格な父親であった洋平も孫に対しては一転して優しい祖父へと変わっている。親父は変わったよと言うのが最近の和志の口癖である。

洋平は二人分のオムライスを持ってリビングへと入っていく。

「婆さん、ご飯できたよ」

「ああ。ありがとうね」

愛子の視線はテレビから微動だにしない。愛子の目の前に皿を置くが愛子は気づいてすらいらない様子だ。洋平がテレビに目をやると冴えない芸能人が少年犯罪について見当違いなコメントをしていると

ころだった。全国放送で無知を晒す程恥ずかしいことはない。

「慎平は大丈夫かねえ」

愛子は死の宣告をされた患者と同じくらい暗い表情を浮かべている。
「慎平は心配ないよ。あの子は十歳にしては珍しく物分りのいい子だ」

愛子には慎平の言葉など届いていないようだ。洋平は気にせず、オムライスにケチャップをかけて食べ始める。

「冷めちゃうから早く食べなさい」

愛子はテレビの方を気にしながらもスプーンを手にして食べ始める。

「和志にちゃんと慎平を教育できるんでしょかね」

「ああ見えて和志はよく考えているよ。婆さんは心配しなくていい
老後を暮らす愛子にとって心の拠り所は大部分を慎平が支配している。

「慎平には中学受験をさせろと何度も言っているのに和志は曖昧に
返事するばかりなのよ。あなたからも何か言ってあげてちょうだい
よ」

昔は息子の和志に対して放任していた愛子も孫に対しては驚くほど
過保護になっている。

「無理に受験させることもないだろ。慎平がどう思うかが大事だよ」

「でもろくでもない中学校に行かせたら慎平もあんな風になってし
まうかもしれないじゃない」

愛子はテレビに映る若者に顔を歪める。

「いい中学校に行かせたから道を外れるわけじゃない。道を外れる
人間はどれを選択しようと結局は道を逸れていくものだよ」

「そうかねえ」

愛子はまだ納得していない表情でオムライスを口へ運ぶ。

「適切な愛情を注ぐことだよ。適切な愛情と僅かなお金。ケチャッ
プとオムライス」

「爺さんは樂觀的すぎるのよ」

「樂觀的にならないとこの退屈な老後は過ごせないよ」

「そうね。いつ痴呆が始まるかもわからないものね」

「そうだよ。まだ孫の顔がはつきり認識できるんだから幸せなものだよ」

洋平は食べ終えた二人分の食器を台所へと運んでいく。

リビングへ戻ってくると愛子はテレビの上に置かれた写真を手にとって眺めていた。

和志が七五三の時に愛子と洋平の三人で撮った写真だ。もうあれから三十年になるだろうか。写真を眺める愛子は穏やかな母親の顔に変わっている。

「慎平・・・」

「婆さん。それは和志だよ・・・」

愛子は写真を手に持ったまま驚いて洋平に視線を向ける。二人の間に長い長い沈黙が訪れる。

<2>

和志は仕事帰りに大阪駅前にあるバーへと向かっているところだった。

もう酔いの回っている会社員や夜遅くまで家に帰らない若者で駅前には活気溢れている。

和志は喧騒を掻き分け、駅前の大通りから細い路地へ入っていく。突き当たりを右に曲がれば目的のバーが見えるというところで、前から来た男にすれ違いざまに肩をぶつけられる。男は小汚い格好をしているが、和志と同じくらいか少し上くらいの年齢であろう。

「すいません」

和志はすぐに謝った。しかし男は振り返ることすらなく大通りへと消えていく。

「音が聞こえない」男はそんな風に言ったようにも聞こえた。

「なんだ、あれは」

和志は嫌な顔をするがすぐに忘れてバーへと向かう。和志の生活において唯一、心休まる時間だ。至福の時。邪魔されてたまるか。

バーの扉を開くとテーブルに恋人同士と思われる男女とカウンターに男性が一人いるだけだった。和志はカウンターに腰を下ろし、顔見知りの店長に会釈をする。

「ピナコラーダを」

上着を脱ぎながら一杯目の注文をする。

「もう家族には話したのかい」

店長がピナコラーダを和志の前に優しく置く。ただでさえ大きな顔に坊主頭、髭は何度見ても堅気とは思えない。

「いや、それがまだだね」

「こんなところで酒飲んでる場合なのか」

店長は笑い飛ばしている。余計な気遣いをする方が和志にとって好ましくないことを知っている。

「自暴自棄ってやつだな。今ならウルトラマンにだってなれる気がする」

「ウルトラマンだって同じ人がずっとやるわけじゃない。ウルトラマンの世界にだってリストラはあるさ」

和志がリストラを宣告されたのは先週末のことだった。突然のことに頭の中は真っ白になり、返事すらできなかった。怒りや焦りが出始めたのは翌日の朝になってからだった。

「石田君は頑張ってくれていたと思う。たまたま今は悪い流れに乗ってしまっただけなんだ。これは石田君がどうだとかそういう問題ではない。気を落とさずに頑張ってくれ」

部長の声が和志の脳裏に甦る。たまたま？悪い流れ？そんな馬鹿なことがあるか。

和志は慌てて頭から悪夢を振り払う。タマタマ。ワルイナガレ。

和志は一息でピナコラーダを飲み干した。

3

「大阪に行かないか？」

竹山がそんな提案を出したのは夕方のことだった。周りの生徒達は

文化祭の練習を始めようと意気揚々としているところだった。

「なんで大阪なんだ。俺は奈良から出たことすらないぞ」

文化祭で何の企画にも参加しない竹山、高橋、山田の三人は練習には行かず近くの喫茶店で会議を開いていた。ウェイターがコーラを三人分運んでくる。ショートカットがとても似合っていてかわいらしい子だ。

「大阪には女も音楽も酒も煙草もドラッグもなんだってあるんだ。

奈良にはないものが沢山ある」

竹山は根拠のない自信で答える。

「東京じゃなくて大阪なんだな」

山田は呆れた顔で聞いてみる。元々文化祭の日は欠席するつもりだったので何をしようか考えていたところではあった。

「そうだ。東京じゃなくて大阪だ。カートコバーンが死ぬ直前に言った言葉を知らないのか。世界は大阪を中心に回っている」

竹山は人差し指を目の前に立てて誇らしげな笑みを浮かべている。

「カートコバーンが死ぬ直前に何言ったかなんて知らないけど多分それは言っていないだろ」

高橋はストローでコーラを飲みながら外を歩く人の群れを見つめて言った。竹山の言うことは8割が嘘でできていると思っている。あいつの本名は実は竹山ではないのではないかと疑うことさえある。

「でも大阪も悪くないな」

「そうだろ。出発は文化祭初日の十月三日だ」

「予定は決まってるのか」

「リアリティを探しにいく。以上だ」

< 3 >

「大阪に行くわよ」

愛子は慎平から届いた手紙を持ってそんな話を話し始めた。

「和志のところに行くのか」

洋平はニュースを見ながら食後のお茶を飲んでいるところだった。

洋平も慎平の手紙には目を通していたので愛子がそう言い出すのは予想していたことだった。

「慎平の発表会があるのよ。最初の晴れ舞台と言ってもいいくらいだし行かない理由はないでしょ」

「慎平はピアノのお稽古頑張ってるんだな」

「私、慎平がコンクールでピアノを弾く姿見たら泣いちゃうかもしれないわ」

愛子はただでさえ細い目をさらに細くしている。

「最後に聞かせてもらったのは三年前だったな。あの頃はまだ聞けたもんじゃなかったけどな。それでも婆さんは目を潤ませながら聞いていたのを思い出すよ」

洋平はリモコンでテレビの電源を消すと慎平からの手紙を手に取り。おじいちゃん、おばあちゃん絶対見にきてね、と大きな子どもらしい文字が目に入る。

慎平がピアノを習い始めたキッカケは洋平の勧めだった。洋平が慎平にピアノを弾いて聞かせてあげたところ慎平は「僕もやりたい」と言った。

しかし、物心がつく頃になると「ピアノなんて女みたいだからやめたい」とも言った。和志も慎平に無理矢理にさせることはなかった。そんな時にまた洋平は慎平にトルコ行進曲を聞かせてあげたのだ。この曲が弾けるまでは頑張るよ、と言って慎平は前言撤回し、ピアノのお稽古を続けた。

「ああ、慎平に会うの久しぶりだわ」

「夏休みに会ったところじゃないか」

「もう夏休みから2ヶ月以上も経つのよ。大分変わってるはずだわ」

「子どもとは言えそんな2ヶ月で変わらないよ」

洋平は孫に会うというだけで平常心を失う愛子に苦笑する。

「コンクールは十月三日か」

持っていた手紙を机の上に置く。

「その日は慎平の誕生日よ。いっぱいお祝いしなきゃね」

「慎平も十一歳か。早いものだな」

「ケーキも買っていかなくちゃ。後、慎平に誕生日プレゼントに何が欲しいかも聞いて買っておいたのよ」

愛子は今すぐにでも大阪へ飛び出していきそうな早口で喋る。

「慎平は何が欲しいって？」

「よくわからないけどニンテンドウDSというらしいわ」

「よくわからんな。婆さんよくそれが買えたね」

「慎平が欲しいと言うのならどこにだって買いに行くわ。実は私も慎平と同じものが欲しくてお揃いで買っちゃったのよ」

「そのニンテンドウDSを？使い方もわからないのに」

「慎平とお揃いなら使い方なんてわからなくてもいいの」

最早、恋人のできた中学生のようだ。

洋平は呆れて返事もせずに、着替えを持って風呂場へと歩いていく。

「十月三日かあ」と独り言を言いながら風呂桶でお湯を掬い、体を流す。

「はて」洋平はいつもの風呂場であるはずが、すぐに違和感に気づいた。石鹸置きが以前の花柄のプラスチックから変わっていた。いつものように座ってタオルに石鹸をつけようと持ち上げると、石鹸の下にはニンテンドウDSと書かれた物体が置かれていた。

「婆さん、ゲームってことすらわからなかったんだな」

4

十月二日。高橋と山田は駅から一番近い竹山の家に泊まることになった。

長い商店街のアーケードを二人は大きなリュックサックを背負って歩いている。

午後八時。辺りの店はどこもシャッターを下ろしている。まるで誰もが心に鍵をかけていて、この世界を拒絶しているのではないかとさえ感じる。物音しない商店街に二人の話し声だけが響いている。

「まさか本当に決行するとはな」

高校に入ってから知り合った山田はまだ竹山のことをよく知らない。
「あいつはそうゆう奴なんだよ。基本的には嘘しか言わないが何故か行動力だけはあるからな」

「あいつは偉そうに嘘をつくからな」

山田は何度も自分の言葉に頷いている。

「まああいつは色々と考えてると思うよ」

「そうだな。憎めない。憎むべきは数学の井上のような奴だよ。」

「偉そうに指図するやつに限って自分の足元が見えていないからな。人に厳しく、自分に甘くだ。自分が同じことをされたらどう思うかなんて生まれてから一回も考えたことないだろうな」

「プライドの高いやつは予想外の攻撃に弱いからな。卒業するときにはシメてやりたい」

二人だけの世界で愚痴をこぼしていると前方から歩いてくる人影に山田が気づく。

「田舎の八時は深夜だぞ。不良め」

高橋は下唇を突き出し、目を細める。しかし先に気づいたのは山田の方だった。

「あれ遠藤じゃないか」

「嘘をつくな。お前も竹山の真似か。遠藤がこんな時間にこんな所を歩いているわけがない。」

近づいてきた人影が二人に手を振る。パジャマにジャンパーを着込んだ遠藤加奈子が駆け寄ってくる。高橋は加奈子に以前から好意を抱いていた。特別に愛想が良いというわけではなかったが話し方、気遣いなどは性別を問わず人を惹きつける何かを持っていた。制服ではなくパジャマという格好も普段とはまた違う可愛らしさがあった。

「ほら見ろ」

「こんなところで何してんだ。もうよい子は寝る時間だぞ。」

高橋は加奈子の顔に指を差す。

「君達こそ何してるの。明日は文化祭よ」

風呂上りなのかいつもはかけていない加奈子の眼鏡に街灯が反射する。

「俺達は文化祭は欠席だからな。明日から大阪に行くんだ」

「本当に？すごい楽しそうじゃん」

「そうだろ。大阪にイマジネーションを探しに行くんだ」

「イマジネーション？」

「リアリティじゃなかったか？」

山田が高橋の顔を覗き込む。

「私も行きたい」

「てなわけだ。もうすぐ遠藤が来るぞ」

高橋は竹山のベッドに寝転びながら事の顛末を話し終えた。

山田は早くも自分の世界を作り始め、本棚の前で漫画に夢中になっている。

「お前ら勝手なことしやがって。まあ高橋の事を考えると面白いかもな」

竹山は高橋に皮肉な笑顔を向ける。

「バラすんじゃねえぞ」

「じゃあ明日の予定は遠藤が来てからにしよう」

「わかった」

山田は漫画を読み終えたのか本棚の隣のステレオへ腰を移している。

「音楽かけてもいいか」

竹山の返事を待たずに山田は再生ボタンを押す。軽快なピアノ音が流れ始める。

「なんだこれ」

「よし。今回の旅のテーマソングはこれだな。トルコ行進曲」

竹山は満足そうに微笑んでいる。

「テーマソングなんているのか」

「お前旅行のガイドブック見たことないのか。どのガイドブックにも持ち物にテーマソングと書いてあるぞ」

竹山の満足気な笑顔をかき消すようにドアがノックされ加奈子が部屋へ入ってくる。

ベッドの脇に大きなバッグを、音を立てて置くと、疲れたと言ってすぐに座り込んだ。

「お前、荷物多すぎじゃないか」

山田は、CDを手を持ったまま目を点にしている。

「女の子は荷物が多いものなの」

「外国にでも行くつもりなのかよ」

山田の言葉には返事をせず、バッグの中を何度も確認している。

「じゃあ明日の事を話すぞ」

竹山は煙草に火をつけると右手を挙げて三人に少し大きめの声で話し始める。

<4>

和志は最寄の淡路駅から家に向かって歩いていった。

飲みすぎたかもしれない。おぼつかない足取りで暗がりの住宅街を歩きながらそんな事を考えていた。目を閉じるとそのまま闇に沈んでいきそうな気だるさがあった。少しでも気を緩めると暗黒の湖に沈んでいってしまう。

民家から零れるテレビの音、笑い声に足を止めた。和志は暗がりに立ち、聞こえてくる家族と思わしき笑い声にしばらく耳を寄せていた。

俺はいつから道を踏み外したのだろうか。どこで選択を誤ったのだろうか。

決して裕福とは言えないが不自由もなく育てられ、周りの人間よりも努力だけはしてきたという自負があった。順調に人生というレールを走ってきていると思っていた。そこに穴があったのかもしれない。和志は今まで生きてきた上での分岐点を振り返っていた。

どこかで違う電車に乗ってしまったのだ。そして気づいた時にはもう終点に来てしまっていた。窓から見える景色も壮大とは言えない

にしても穏やかで心地よさすら感じていた。乗り間違えたなんて疑う余地もなかった。

もう戻ることはできないのだ。

「道を外れる人間はどれを選択しようと結局は道を逸れていくものだよ。」

いつか父が零した言葉が脳裏に浮かぶ。

「道を外れる人間か」

和志はまた暗がり歩き始める。しかし父はその後にも言った。「でも正しい道なんてものは存在しないよ」

和志は零れ落ちそうになる涙を瞼に力を込めて堪える。上着のポケットからイアホンを取り出し、おもむろに耳に突っ込むとビルエヴァンスがファンカレロを演奏しはじめるところだった。

タマタマ、ワルイナガレ。部長の宣告が伴奏に乗って流れては消えていく。

絶望の中にも悪くない心地よさがあつた。

そろそろ話さなくてはいいけない。和志は妻の陽子と、息子の慎平の事を考え始めていた。

家庭には何一つ不満はなかった。陽子は細かいことまで追求するような性格ではなかったし、比較的自由にさせてもらってきたと思っている。そして何よりまだ十歳の息子は可愛かった。それだけに話すことができなかった。

妻と息子は無職の父を受け入れるだろうか。軽蔑の目を向けるかもしれない。

少なくとも悪い流れに乗ってしまったただけなんだと言っても納得はしてくれないだろう。

気づいたらもう家の前に着いていた。和志は大きな音で大きな溜息をついた。

ビルエヴァンスはファンカレロを演奏し終え、トゥー・ロンリー・ピープルを演奏し始めた。

「トゥー・ロンリー・ピープルか。畜生。今の俺にピッタリじゃな

いか」

和志は家には入らず駅へと引き返していた。

<5>

十月三日。洋平と愛子は午前九時を過ぎた頃、JR大阪駅に到着していた。日曜ということもあり駅は人で溢れかえっていた。家族連れ、寄り添うカップル、スーツを着た社会人。皆がせわしく早足で過ぎ去っていく。

蟻みたいだと洋平は思った。人酔いの不安がよぎったのなんて何年ぶりだろうか。

二人はJR大阪駅の改札を抜けると阪急梅田駅を目指した。駅を出ても人の群れは引くことがなかった。洋平は慣れない街に來ると決まって人間観察に夢中になる。

あそこに一人で立っている青年は女性でも待っているのだろうか。服装を見たところおそらく大学生であろう。ふと上げた顔を見て洋平は女性の尻にしかれるタイプだなと確信した。必死に携帯電話の液晶に釘付けになっている。何故あそこまで食い入るように見ているのか不思議であった。もしかしたら遺言でも送られてきたのかもしれない。

二人は大きな歩道橋に差し掛かっていた。目の前には車のクラクションが響き渡っており、無数の列を成していた。至るところでクラクションが鳴らされている。自動車のオーケストラのようだ。二人は歩道橋をゆっくりと昇っていく。

「爺さん、静かになったけど大丈夫かい？」

洋平は愛子の呼びかけに驚いた表情で振り向いた。

「あ、ああ、大丈夫だよ。少し考え事をしてただけだよ」

「何を考えていたの。慎平のこと？」

「いや、若い女性のおっぱいを観察していたんだ。哲学的な視点からね」

「またそんなエロジジイみたいな事言って」

歩道橋を昇り終えて広い通りに出ると若い男性がアコースティックギターを持って、その周りには僅かな人ばかりができていた。青年はジョン・レノンのイマジンを熱唱している。

I hope someday you'll join us.
And the world will live as one.
いつの日か君も仲間に加わってくれよ。

そうすれば、この世界はひとつになって動くだろう。

辺りを見回すと高層ビルが空を突き刺すように聳え立っている。

「大阪は賑やかなね」

愛子は口元を緩ませた。慎平に会うことが楽しみで仕方ないのだろう。

「活気に溢れているね。半日いたら疲れてしまいそうだ」

反対側の階段の近くではまた別の若い男性が拡声器を持って何やら叫んでいた。これまた人ばかりができていく。大阪は不思議な街だ。二人はゆっくりと階段を一段ずつ下っていく。拡声器から零れた声が辺りに響き渡る。

「リアリティってなんですか」

二人は阪急梅田駅に着くと河原町行きの普通電車に乗り淡路駅を目指した。

二人は長旅の疲れをシートに染みこませるように座った。

「ああ、疲れたよ」

洋平は目を閉じて言った。

「疲れたね」と愛子は言った。

「日曜日だから人が多いから仕方ない。慎平に会ったら吹き飛んじやうよ」

洋平は窓から見える景色を眺めていた。と言ってもどこもかしこもビルで溢れかえっているだけだ。隙間からは太陽の光が覗き込み、それが何かのエネルギーのように人は忙しく活動していた。人間っ

て沢山いるんだな。改めてそう思った。百年生きたって顔を合わせない人は山ほどいる。駅ですれ違った人だって今日一回きりの一瞬の繋がりを持っただけなのだ。

愛子は鞆から紙切れを取り出した。昨日、和志の妻である陽子に聞いて書き記した駅から家までの道順だった。

「駅を出たらすぐ右に曲がって、突き当たりを左。三つ目の信号を右。わかった？」

愛子は確認を洋平に求めた。

「右で左で右だね。わかったよ」

車掌のアナウンスが聞こえる。次が淡路駅だ。

電車を降りても愛子は呪文のようにぶつぶつと呟いていた。

「右で左で右」

愛子は切符を改札に通すと、子どものような笑顔を浮かべた。

洋平もその様子を見て少し幸せな気分になった。

二人は幾分か足取りも軽くなったように早足で駅の出口を目指した。そして寄り添うように出口をくぐると二人は左に向かって歩いていった。

5

十月三日。竹山、高橋、山田、加奈子の四人は奈良駅から七時六分発の電車に飛び乗り、大阪駅を目指していた。この電車に乗れば八時過ぎには着くはずだ。

「あんたがぐずぐず寝てるから走る羽目になっちゃったじゃないの」
加奈子は口を尖らせる。

「第一、朝早すぎるよ。一泊するんだからゆっくり行けばいいじゃないか」

山田は必死に言い訳をする。

「まあ間に合ったんだからいいじゃないか」

高橋は加奈子を宥める。加奈子は頬を膨らませて窓から目を離さない。

「ここからとりあえず一時間だ。寝たかったら寝てくれていい」

竹山がコンビニで買ったサンドイッチを食べながらみんなに言った。

「ほんとに昨日話しただけの予定でいくのか」高橋は言った。

「他にすることはその場で決めればいい。高橋は何かしたいことがあるのか」

「いや、特にあるわけじゃないけど。無計画でもいいとこだな」

「楽しくいこう。ビジネスホテルだけど我慢してくれよな。俺は山田と同じ部屋でいいし」

「どういう意味だ。」

「お前は遠藤と寝ればいい」竹山は高橋の耳元で囁く。

加奈子と山田は打って変わり、二人でガイドブックに夢中になっている。

竹山は左手で加奈子のお腹を指差し、右手で腹の膨らむ仕草をする。

「馬鹿。何言ってるんだよ」

「俺がうまくやってやる」

竹山は高橋に親指を突き上げてにんまりと笑う。

「何の話してるの？」

加奈子はガイドブックから顔を上げる。

「お前の子どもの話だよ」

「なにそれ。私、妊娠してたんだ」

「遠藤の子どもは可愛いだろうな。クマのプーさんみたいな顔でさ。みんなに可愛がられるんだ」

「あれはクマだから可愛いんですよ」

「たまには人間からクマが生まれてもいいじゃないか。遠藤はクマは嫌いか？」

「クマは嫌いじゃないけど、クマみたいな人は嫌かな」

「じゃあ遠藤のタイプの人を聞こうじゃないか」

山田が威勢よく割って入ってくる。

「どうだろ。正直で、気配りのできる人かな」

「正直か。嘘つきの竹山は早くも脱落だな」山田はケラケラと笑う。

「マイペースのお前も脱落だろ」

「じゃあ消去法で残ったのは高橋か」竹山と山田は高橋に目を遣る。高橋は顔を紅潮させ、膝の上で指をモジモジと動かしている。

「高橋どうしたの。おしっこしたいの？もう漏れちゃった？」

加奈子が驚いて高橋の肩を揺する。高橋は言葉を発さず俯いている。「漏らしちゃったなら私のパンツで良かったら貸すよ？」冗談を言っ
って加奈子は笑っている。

パンツ……。高橋は真っ赤に染まった顔を下げたまま、自分のパンツが湿り始めていく感触を味わっていた。電車は新今宮駅へ到着しようとしていた。

電車が動きを止めた頃、高橋の足元には大きな水溜りが出来上がっていた。

新今宮からは環状線に乗れば大阪まで二〇分もかからないだろう。

<6>

十月三日。和志は目が覚めた時、自分がどこにいるのか即座に理解することができなかった。

体が重かった。ベッドの上に横たわったまま頭の中を整理していく。家から大阪駅に引き返して居酒屋に入った。そこからは記憶が飛んでいた。今、ホテルにいる。

和志はゆっくりと力を入れて体を起こす。スーツのまま寝てしまったようだ。でももうスーツにできた皺も気にする心配はない。ポケットから携帯を取り出すと三件の着信履歴が残っていた。陽子からだ。携帯の液晶は十月三日八時三分を記していた。

「そうか、今日は慎平のコンクルの日か」

和志は自分にも聞こえるか聞こえないかのか細い声を出した。家に戻らないと。和志はネクタイを外してポケットの中に押し込むと、ホテルを後にした。

ホテルの外へ出ると朝早くから活動する人が多いことに驚いた。和志はデパートの磨かれた窓に映る自分を立ち止まって確認した。

ノーネクタイに寝癖。これでは休日出勤のサラリーマンには見えない。

孤独だ、と思った。自分が一番不幸だとは思わない。自分よりも不幸な境遇にいる人は沢山いるだろう。でも今、自分は一番孤独だという自信はあった。いまや家族にさえ恐怖を抱いている。いつ愛想を尽かされるかわからない。数年前までの自信に満ちたサラリーマン生活は音を立てて崩れ落ちていった。そして崩れ落ちた空間には劣等感という薄暗い闇が広がっている。闇に射し込む一筋の光のように携帯電話が光り、振るえ、着信した。

陽子からだ。和志はしばらく考えてから電話に出ることに決めた。

「もしもし、あなた？」

「おう。すまない」和志は無意識のうちに謝罪の言葉を発していた。「今日は何の日か覚えてないの。お母さんやお父さんも家にもうすぐ来るのよ」

「わかってる。慎平のコンクールだろ。ちょっと仕事が入り込んでしまってホテルに泊まってたんだ」

「そうなの。で、来れるの？」

「それは大丈夫だ。ちゃんと間に合うように行く」

そう言うと、和志は電話を切った。

当てもなく街を彷徨い続けた。誰もが蔑んだ視線を自分に向けているのではないかと感じる。自分は醜い獣だ。獣は檻に入れられ、好奇の目を向けられる。獣はどこにも行けない。

ここはどこだ。上を向いても空は見えない。

6

山田が大きく両手を広げて伸びをする。

「やっと到着か」

加奈子は目を眠そうにこすっている。

「着いたけど、どこ行くの」

「人通りの多いところを探す」竹山が答えた。

「どこもかしこも人は多いぞ」高橋は辺りを見回して顔を歪める。
「お前ほんとにやるつもりなの？」

「やるよ。演説をするよ」竹山は自分自身に確認するように言った。
四人は出口を出ると人の流れに逆らうことなく進んでいく。

「想像以上ね。まだ八時よ。朝早くからお出かけかしら」

「日曜日だからな。」

四人は人込みを抜けると大きな歩道橋を昇っていく。

「スーツ着てる人は休日出勤かな」山田が言った。

「そうだな。ご苦労なことだ。」高橋は言った。

「あれもか？」山田は階段の下を重い足取りで歩く男を指差す。

皺の目立つスーツにノーネクタイ。頭には寝癖。

「あれは朝帰りの会社員か」竹山は言った。

「それかりストラを言い渡された失業者だな」

四人は階段を昇りきる。秋風が頬を打ち少し肌寒い。ある者は階段を足早に降りて駅に向かう。またある者は階段を楽しげに昇り、駅を離れる。

茶色い壁で覆われたビルにまた別のビルの影が映りこむ。空は透き通ったブルーで純白の雲が漂うように移動していく。もう一度ビルに視線を戻すと影は消え去り、全体を薄暗く照らしているだけだった。

「ここでもいいんじゃないか」高橋が口を開いた。

「そうだな。ここならいいスペースだ」

「俺達も隣にいたほうがいいのか」

「いや、お前達は近くでブラブラしてればいいよ」

竹山は鞆を足元に置いて中を探り始める。そしておもむろに中から小さめの拡声器を取り出す。

「じゃあ俺達はそのへんにいるよ」竹山を覗く三人は近くで似顔絵を書いている女性の方へ興味を示して歩いていく。足元に飾られた何枚もの絵を見て加奈子が感嘆の声を挙げる。

それを打ち消すように拡声器から響く竹山の声が耳へ届く。

「あー。あー。少し僕の話聞いてください。皆さん生きてますか。猫の話をします。先日、飼っていた猫が死にました。僕が子どものころから飼っていた猫でツバキと言います。ツバキは父親が知り合いから猫が子どもを産んだということで貰ってきたため僕達の家族の一員となりました。家族で決めたルールで僕は餌をあげる当番に決まりました。僕は十年間欠かすことなくツバキに餌をあげ続けました。しばらく経つと餌を持っていくだけで僕に擦り寄ってくるようになりました。綺麗な真っ白の毛並みに赤い首輪がとてもよく似合っていました。僕は毎日習慣のようにツバキに餌を与え続けました。ツバキは大食いの猫でした。好き嫌いもなく家族の残した残飯でさえ嬉しそうに食べました。でもどんどん食欲はなくなっていました。そしてツバキは死にました。しかし僕には悲しみも寂しさも残りませんでした。ただツバキが死んだという情報が僕の中で通過しただけでした。まさに無の状態です。僕は異常だと思いました。十年も餌をあげ続けた猫が死んだんです。でも僕の中には何も残りませんでした。生きてること、死んでいくこと、それが理解できないのです。生きることと死ぬことの境界を引くことができないと気づき、そこで僕の中に初めて寂しさが込み上げました。」

加奈子達は描いてもらった似顔絵を受け取り、嬉しそうに何度も頭を下げている。

「僕は自分自身が生きているのか死んでいるのかさえ、上手く理解できていません。皆さんは今生きていますと実感していますか。どんな時に生きていますと感じますか。友達と遊んでいるときですか。ゲームをしているときですか。恋人ができたときですか。誰かが死んだときですか。

僕には全くわかりません。もし、一番大切な人が死んだら僕は どう思うだろう、そんなことさえ考えることがあります。とても寂しいことです。もちろんそうやって考えてしまうことです。大人は、今の子どもはリアリティが欠けていると言います。偉そうなおじさんがテレビごしに偉そうに言うんです。リアリティが欠けていると。

僕に言わせればその言葉さえリアリティが欠けているんです。そもそも。リアリティってなんですか」

高橋、加奈子、山田の三人は反対側でアコースティックギターを持った青年を囲むように座っている。青年はジョン・レノンのイマジンを歌い始める。拡声器から溢れ出た音が、アコースティックギターが奏でる音と混じりあい、真っ青な空へ消えていく。

<7>

愛子と洋平は陽子の運転するマーチの後ろに並んで座っている。

「なんで九時過ぎには大阪に着いていたはずなのにあんなに遅くなっただんですか」

陽子がバックミラー越しに二人の顔を窺う。

二人は恥ずかしそうに笑う。

「ちゃんと地図を確認したはずだったんだけどね。駅から迷っちゃったのよ」

愛子はハンカチで汗を拭きながら答える。

「すいません。私の説明が下手糞だったのかもしれないわ」

「いや、いいのよ。ちゃんと慎平のコンクールの時間には間に合ったんだから」

助手席には慎平を乗せて、四人は大阪駅近くのコンサートホールに向かっている。

「慎平大丈夫か。緊張してるか」

車に乗ってから口数の減った慎平に洋平が声をかける。

「大丈夫だよ。僕、いっぱい練習したからおじいちゃんよりも上手くなってるよ」

慎平は椅子の背に両手をかけて後ろを向いている。

「こら慎平。前向いていないと危ないわよ」

愛子は家に着いてから慎平の世話焼きに追われている。しかし午前中の疲れは嘘のように活き活きとした顔をしている。

「陽子さん。和志ったら慎平のコンクールの日だっていうのに今日

も仕事なの？」

「いえ、朝連絡があったんですけど、ちゃんとコンクールには来らしいですよ」

陽子は居心地の悪そうな顔をしている。

車は国道を直進し、信号を右折していく。陽子はアクセルを踏み込む。車は並木道をさらに加速していく。

「仕事だから仕方ないよ」

洋平が窓から外を見ながら小さい声で言った。左に見えるスーパーでは数人の男が忙しそうに荷物を運んでいる。

慎平は楽譜に目を通し何度も呟くように確認をしている。

「着きましたよ」

陽子がゆっくりとブレーキを踏み、車は停止する。

四人が車を降りると隣の車に親子と思われる女性と子どもが近づいてくる。

「あ、光平君。どうだったの？」 慎平が駆け寄っていく。

「慎平君。うん。大丈夫だったよ」

「そっかあ。よかったね。僕も今から頑張ってくるね」

陽子は女性に向かって会釈をして一言二言程の会話をしている。

車に乗って駐車場を出て行く光平に向かって 慎平は大きく手を振っている。

「光平君は午前の部の発表だったんだ」

「さっきの子、なんだか浮かない顔していたけど失敗しちゃったのかな」 愛子が言った。

「多分違うよ。光平君のお父さんがね、三日前くらいから家出しちゃったらしいんだ」

「家出。なんでまた」

「わかんない。でも前からおかしかったらしいんだ。光平君がしゃべりかけても同じ言葉しか言わなかったらしくて、そのままいなくなっちゃったみたいなの」

慎平は自分の事のように暗い顔をしている。

「そうなんだ。お父さん、今日も来てくれなかったのかもしれないね」

愛子は慎平の頭を優しく撫でた。

「じゃあ僕はこっちだから行くね」

慎平は愛子達とは違う入り口を指差す。

「緊張せずに頑張るのよ。失敗しても大丈夫だからね」

慎平は楽譜を右手に持って大きく手を振りながら駆けていく。

7

高橋は目の前に置かれた特盛カレーライスに満足気な笑みを零している。

十二時。四人は駅前にあるカレー屋で昼食を取っていた。周りを見渡すと自分達以外は全て家族連れだ。

山田は早くもスプーンを手にしてカレーライスと格闘を始めている。

「これからどうする？」竹山が口を開く。

「私、買い物したいかな。せっかく大阪来たんだし」

「そうだな。じゃあ食べ終わったら辺りを歩いてみるか」

「賛成」高橋が口にご飯を頬張りながら返事をする。

「しかし本当に無計画なんだな」

「いいんだよ。事前の計画程当てにならないものはないよ」

「私ちょっとトイレ行ってくるね」加奈子が立ち上がる。

「あ、山田もちょっと来てよ」

「別にいいけど」山田がスプーンを持ったまま驚いて顔をあげる。

山田も立ち上がって加奈子を追いかけていく。

「なんだ。あいつら。デキてんのか」高橋は苛立ちの表情を浮かべる。

「さあ。たまたまじゃないか。あんまり気にすんなよ」

「気になるだろ」

「お前は女関係の話になるとからっきし駄目だからな。さっきの電車といいな」

「うるせーよ」そう言うとき高橋はまた皿へ視線を戻した。

四人は店を出るとどこを行くでもなく歩き始めた。

「あの店行こうよ」加奈子が遠くの大きな看板を指差す。

「わかった。道はよくわからないけど方向は看板目指せばいいしな」
四人は電車の高架下をくぐり看板を目指す。頭の上で特急列車が通過していく。

交差するように人が高架下を歩いていく。

「何か買いたいものでもあるのか」高橋が言った。

「服よ。服」

「お前以外全員男なのにな」

「いいじゃない。別に」加奈子が頬を膨らませる。

「まあいいじゃないか。付き合ってやろうよ」山田が高橋を諭す。
細い歩道を端に寄りながら四人は進んでいく。

前から青年とは言えない中年程の男が近づいてくる。先頭を歩いていた高橋が立ち止まって道を開ける。しかし男は直進して高橋の肩にぶつかると振り返ることなく早足で進んでいく。

「いてえ」高橋はバランスを崩す。

「おい、おっさん」

男は四十歳手前といったところだろうか。あまり綺麗とは言えない格好をしていた。

高橋の声は男には届かず、そのまま地面へ着地して消えた。

高橋は怒りを露にして男を追いかけていく。

竹山が「おい、ほっとけよ」という制止の声を発した時には既に高橋は男を追っていた。

高橋は走って追いつくと、男の肩に手をかけて振り向かせる。

「こっちが道をあけてるのにそれはないだろ。一声もなしか」

男はぶつぶつと何かを呟いている。視線は高橋ではなくどこか遠くを見ている。

「は？聞こえないって」

「音が聞こえない」

高橋が男の襟首を握って壁に押し付ける。

「音が聞こえない」

男は何を言われてもそれしか答えなかった。竹山達が走り寄ってくる。

そして男は高橋の腕を振り払うと全力で走り始める。

「そんな奴ほっとけよ。あっち行くぞ」

しかし高橋はまたも男の後を追いかけていった。

三人もまた高橋の後を追っていく。来た道を戻っていくと右折して線路沿いを走っていく。

「おい待てよ」

竹山の声は電車の音にかき消される。飲食店が立ち並ぶ道を進んでいく。人が多く、追いつこうにも追いつくことができない。楽しい会話をして映画館を出て行く人達を尻目に竹山達は全速力で走り抜けていく。前方では信号機が青から点滅し始める。三人はさらに足を速めると高橋の背中を追っていく。

右手には高速道路が走っており轟音を響き散らしている。この速さなら高速だって車と並んで走れるんじゃないか、竹山は走りながらそんな事を考えていた。

人込みを抜けて狭い道に出ると前方の大きな駐車場で高橋が肩を揺らして立ち止まっていた。竹山と高橋が駆け寄って立ち止まる。急に足を止めた途端、呼吸が猛烈に苦しくなった。どれくらい走っただろうか。何が起こったのだ。頭の中は真っ白で何も考えることができない。遅れて加奈子が追いついてくる。

「くそ。逃げられた。この駐車場に入って行ったのは見えたんだけどな」

高橋が息を切らしながら言った。

「あんな奴ほっとけばいいだろ。どれだけ走らせるんだよ」

四人は駐車場に座り込んでいる。アスファルトにつけたお尻がひんやりと冷たい。

駐車場は半分程が車で埋まっている。その先には歪な形をした大きな建物が駐車場に影をつくっている。

「看板見えなくなっちゃったじゃない」加奈子が口を尖らせる。

「ごめん。みんな」高橋が三人に頭を下げる。

「なんで大阪まで来て鬼ごっこやらないといけないのよ」

「ちょっと頭に血が昇っちゃってさ。ついやっちゃった。鬼ごっこ」

「高橋は変な男追いかけていくし、山田達は私置いて高橋追いかけていくし。なんでそもそも鬼が二人もいるのよ」

「ごめんって。鬼が二人もいてごめんよ」

「とりあえず喉が渴いた。あっちで休憩しにいこう」

山田は立ち上がると一人で建物に向かって歩いていく。その建物は近づいて見てみると屋根には羽のようなものがついており、外から見ただけでは何のための建物なのかは判別することができなかった。山田は入り口のガラスに貼られた紙を見ると、後から歩いてくる三人に手招きをする。

「ピアノのコンクールやってるみたいだぞ」

三人は山田の横に寄ってくると貼り紙を囲んでもう一度目を通す。

「どうせだし寄ってくか」

竹山は三人の返事は聞かず、中へと入っていく。

※

「陽子さん。慎平緊張せずにうまくできるかな」

愛子は席に着いたときから直前に控えた伴奏者のように落ち着かない様子を見せている。

「大丈夫ですよ。慎平はいっぱい練習していましたから」

「慎平より婆さんの方が緊張してどうするんだ」洋平が愛子の肩に手を置いて緊張を取り除くように優しくほぐした。

「私がどれだけ慎平のコンクールを楽しみにしていたと思ってるの」

「わかっているよ。いつも家においても慎平のことばかり話してるかな」

洋平と陽子が目を合わせて苦笑する。

「陽子さん。慎平は次の次だね」洋平が間に挟む愛子を飛び越して声をかける。

「そうですね。もうすぐですね」

愛子は真っ直ぐを見据えたまま、まるで形見のように大切にハンカチを握り締めている。

伴奏と伴奏の合間の短い休憩が終り脇から次の伴奏者である子どもが誇らしげに歩いてくる。三人は会話をやめ、視線を壇上に移した。少年はピアノの脇で立ち止まると深々とお辞儀をした。慎平はもう次の準備をしているだろう。

少年は地面に足が着くように椅子に浅く腰掛ける。

愛子の事を言いつつも、陽子は次に迫った慎平の伴奏を前に鼓動が早くなるのを感じていた。少年はゆっくりと両手をあげると鍵盤を確認するように静かに指をセットした。

陽子が横目で確認すると愛子は涙を流していた。

陽子はまだ一度視線を壇上へ移す。

「慎平・・・」

陽子は背筋に電気が走ったような衝撃を感じた。そして伴奏ではなく、横に座る愛子に耳を傾けて息を飲み込んだ。

「慎平・・・その調子よ」

陽子は驚きのあまり目を見開いて愛子の方を振り向いた。

そして洋平の方へ視線を移すと、洋平は申し訳なさそうに何度も何度も陽子に向かって軽く頭を下げていた。

※

和志は無意識のうちにコンサートホールへと足を運んでいた。

頭の中はひどく混乱していた。しかし片隅には慎平のコンクールの事が根付くように沈殿していた。そしてそれが無意識のうちに和志の足をコンサートホールへと運んでいた。

陽子に顔を合わせるの日は追うごとに苦痛に変わっていった。

そしてなにより今日両親に顔を合わせるのは何事にも変えがたい苦痛であった。

和志は重い足取りでホールの二階にある大きな扉を開く。

ホールの中は静まり返っていた。その静けさはまるで和志の到着を皆が待ち受けていたかのようであった。

静寂を打ち消すように慎平が壇上に姿を見せる。ピツタリだ。

和志は慌てて最後列の席に腰を下ろす。陽子や両親は探さなかった。慎平がお辞儀をして椅子に腰掛けようとしている。和志はスローモーションを見ているようだった。慎平が鍵盤に手を差し伸べるまでを一コマ区切りで視界に吸収していく。

和志は大きく息を吸い込む。慎平はテレパシーでそれを確認したかのように鍵盤を叩き始める。

トルコ行進曲。

父が何年か前に慎平に聞かせた曲だった。慎平は軽快に鍵盤の上で両手を滑らせていく。

和志は気づいたら瞼から涙が零れ落ちていた。体中の重荷や不安が涙に乗って流れていくようだった。和志はここ何日なかったような落ち着きが体を支配していた。気づいたら悩まされた孤独感是不思議と消えていた。

耳に伝わるメロディーが和志の心を振動させ、ぐるぐると頭の中にある混乱をかき消していった。

話そう。和志はそう決めた。家族に、両親に全て話そう、と。

そう決めると和志の体はさらに軽くなっていくようだった。

和志は背もたれに深く腰をかけるとゆっくりと瞼を閉じた。

慎平が鍵盤の上に指を走らせる。

音符の集合が綺麗なテンポに乗ってホール内を漂い、和志の耳に届いていく。

※

四人が扉を開けてホール内に入ると耳に聞き覚えのある音が飛び

込んできた。

「言ったよな」竹山が高橋と山田に目を見合わせる。

「言った」二人が息を合わせたように同時に答える。

「言った。どのガイドブックにも持ち物にテーマソングと書いてある」

加奈子は訳が分からずにきよろきよろと三人の顔を窺っている。

四人は空いている席を探すと並んで座る。

「さっき遠藤に何言われてたんだ？」高橋が山田に耳打ちをする。

「さっきって？」

「カレー屋だよ」二人は囁きながら会話を交わす。

「ああ」山田は返事に躊躇う。

「遠藤がな、夜に竹山と同じ部屋に泊まれるようにセッティングしてくれて・・・」

山田は申し訳なさそうに答える。

高橋はそれっきり何も言わず、視線を壇上に固定した。

知らず知らずのうちに目からは大粒の涙が零れ落ちていく。

加奈子は辺りを見回して落ち着かない様子を見ている。

「どうした」竹山が見かねて声をかける。

「なんで大阪まで来てピアノのコンクールなんて聴かないといけないのよ」

「いいじゃないか。黙って聞いとけ」

「無理よ。退屈だわ」

「馬鹿だな。退屈なものが退屈な人生を満たしていくんだよ」

※

ホール内の空気は依然ピアノが奏でる音によって振動している。

ある者は歡喜の涙を流し、ある者は決意の涙を流す。またある者は失恋の涙を流す。

同じ月の下で、皆がそれぞれ違う夜を過ごしていく。

I hope someday you'll join us.
And the world will live as one.
いつの日か君も仲間に加わってくれよ。
そうすれば、この世界はひとつになって動くだろう。

おわり

(後書き)

お勤めごころうさまです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4866d/>

あるコンサートホールで

2011年1月12日03時00分発行